

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
熱海市	熱海市立第一小学校	258
御前崎市	御前崎市立第一小学校	652

※ 児童生徒数については、今年度、協力校に在籍する児童生徒数を記述する。

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

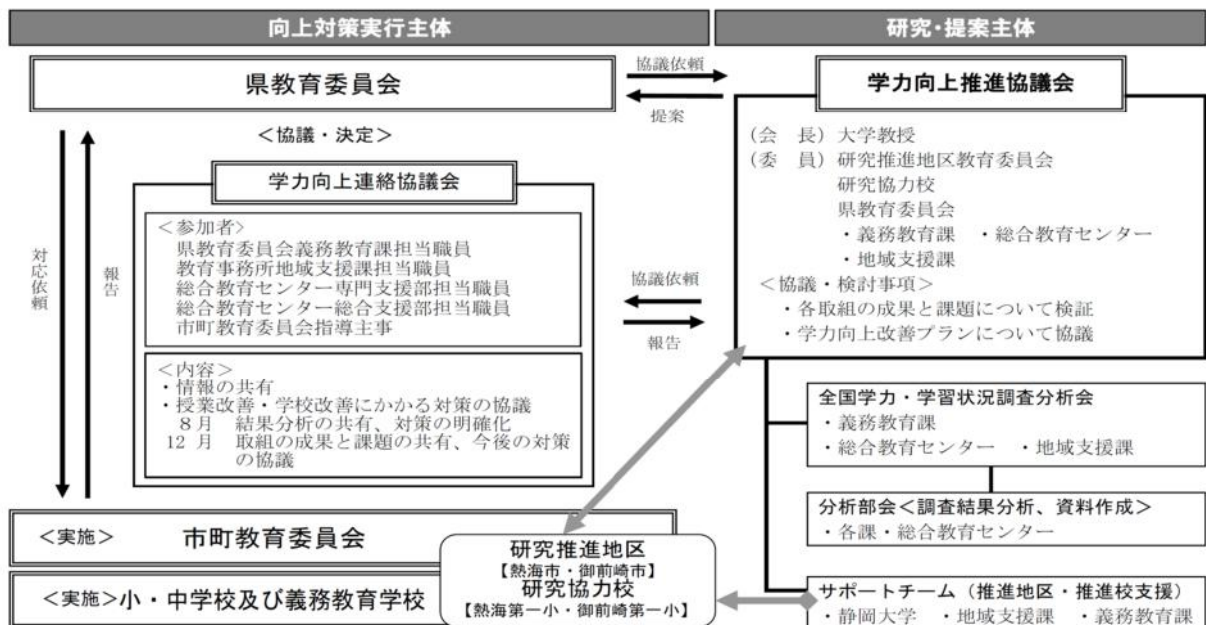
「学力向上推進プロジェクト事業」を中核に実践研究を進めた。

(1) 学力向上推進プロジェクト事業

学力向上推進プロジェクト事業

○ 学力向上推進プロジェクト

確かな学力の育成のため、全国学力・学習状況調査結果を受け、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや推進地区、推進校による実践研究を通じた学力向上の具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。



ア 静岡県学力向上推進協議会の設置（年3回）

推進地域、推進地区、協力校の課題を踏まえた上で、重点課題を解決するための手だてを吟味し、推進校、推進地区の実践を通して成果について検証し、改善モデルを示した。本年度は、特に協力校の取組について、入念に委員で実態を情報共有し、具体的な改善案を検討した。

2. 推進地区における取組

(1) 熱海市について

ア 熱海市の取組

- (ア) 学力・学習状況・生活習慣について分析・伝達
- (イ) 授業改善に向けての学校支援（協力校を中心に）
- (ウ) 「学び続ける教師のチェックシート」の実施と市内全学年の学力把握
- (エ) 熱海市学力向上委員会（年2回）

イ 推進地域としての関わり ※上記項目(ア)～(エ)に対応

- (ア) 年3回県主催の学力向上推進協議会において、熱海市の結果を分析し、今後の取組の具体案を提案した。
- (イ) サポートチームを派遣し、授業参観し事後研修にて課題を明らかにし、授業改善に向けて指導・助言を行った。
- (ウ) 学力向上推進協議会において、活用法について共有し、改善点等を協議した。
- (エ) 県主催の学力向上連絡協議会との連携が図れるよう、プレゼンテーション資料やデータ等の共有、説明を行った。

(2) 御前崎市について

ア 御前崎市の取組

- (ア) 市スクラム研究会（年2回）の充実
- (イ) 協力校への支援、指導主事の派遣
- (ウ) 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査(CRT)の活用
総合質問紙調査(i-check)と全国学力・学習状況調査結果のクロス集計と活用
- (エ) 保護者向けリーフレットの配布

イ 推進地域としての関わり ※上記項目(ア)～(エ)に対応

- (ア) 学力向上推進協議会において、御前崎市の研修会の趣旨、内容等を共有し、学力向上に向けての取組を検証した。
- (イ) 市の指導主事派遣に合わせて、サポートチームを派遣し、授業で見られた課題等について協議し、授業改善に向けて指導・助言を行った。
- (ウ) 推進協議会長による分析サポートを行った。
- (エ) 学力向上推進協議会において、情報共有し、家庭学習のあり方等を推進地区、協力校代表と協議した。

3. 協力校における取組

(1) 熱海市立第一小学校の取組

ア 全国学力・学習状況調査、定着度テストの活用

国語の課題「決められた時間の中で文章を読みとる」、算数の課題「小数と分数の意味理解」「数学的な考えを要する問題」の改善に向けて、調査データを活用し、具体的な取組を計画し実施した。

イ 確かな学力を育むための授業実践

学校体制で「論理的に考えることの楽しさを感じる授業」に取り組んだ。

ウ 多面的・多角的に授業を問い直すためのサポート体制の構築

主体的・対話的な深い学びができる授業を目指し、校内研修を通して考えることの楽しさを味わう授業づくりを行った

(2) 御前崎市立第一小学校の取組

ア 校内研修の充実による授業改善

算数科を窓口とした授業改善を中心に、自尊感情を高める学級づくりなど教育活動全体で研究を推進した。

イ 学びの土台づくり

子どもが主体的に学び、思考する授業の土台づくりを全校で足並みをそろえて取り組んだ。

ウ 児童の現状と課題把握

総合質問紙調査 i-check 等から児童を客観的な視点で把握した。また、標準学力調査により、教員が単元ごとの理解度を把握し、授業に活かせるようにした。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 熱海市立第一小学校の成果

ア 各種学力調査における結果から

4月、全国学力・学習状況調査の結果において、苦手としていた算数の活用問題に成果が見られたものの、課題も多かったのだが、9か月後の県定着度調査の結果からは、学習した内容が概ね定着している状況が見て取れた。

イ アンケートから

子供たちの授業への意欲が向上している。しかし、「学習した内容を理解していない」と回答する子供も1～2割いることも分かり、慎重に対応すべき課題と言える。

(2) 御前崎市立第一小学校の成果

ア 児童の自己評価から

学びの土台づくりが進んでおり、「授業がわかる」と回答した児童の割合が増えた。

イ 保護者の評価から

子供の学習や学校の取組への関心が高まっていることが分かった。

ウ 外部評価から

授業の準備や子供自身の学ぶ姿勢に高い評価が得られた。

2. 実践研究全体の成果

(1) 「PDCA改善サイクル」の共通実践

県、市町、学校レベルでスケジュールを共有し、同一歩調で取り組むことで子どもたちの学力向上を目指してきた本県の「PDCA改善サイクル」(W-PDCAサイクル)が確実に定着してきている。

この「PDCA改善サイクル」に則って推進されてきた学力向上推進プロジェクト事業を中核にして本研究を進めたことで、推進地域、推進地区、協力校との間で、学力向上に向けた具体的な支援や取組について共通理解を図ることができた。

(2) 推進地区の取組

推進地区においては、全国学力・学習状況調査結果を詳細に分析し、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かせるような各学校へのサポート体制が充実してきている。

また、それぞれの市で、研修テーマの市内統一や、市独自の早期対応等、特色ある学力向上の取組が推進されていることも、本研究を行った大きな成果と言える。

(3) 協力校の取組

協力校においては、全国学力・学習状況調査結果を詳細に分析し、早期に自校の実態を把握して授業改善に生かす取組が積極的に行われた。サポートチームや推進

地区の指導主事が、協力校の実態を踏まえた適切な助言を行ったことで、校内研修がより活性化された。

3. 取組の成果の普及

(1) 推進地域

全国学力・学習状況調査の問題や本県の現状と課題について共有し、早期に学校改善、授業改善に生かすための教師用動画コンテンツを作成した。作成した動画コンテンツ（国語編、算数・数学編、理科編、質問紙編）を県教育委員会HP上に公開し、夏季休業中の校内研修での活用を各学校に促した。このコンテンツを含めた全国学力・学習状況調査の結果を活かした取組は、文部科学省発行「平成30年度全国学力・学習状況調査 活用事例集」（平成31年3月）に紹介された。

推進地区と協力校の研究実践については、「学力向上推進協議会報告書」に推進地区と協力校の研究実践を掲載し、全市町教育委員会、県内全小中学校に配布予定である。

(2) 推進地区

保護者への啓発や、市主催の研修会で教職員に情報共有する等、学力向上の取組について、内容とともに成果も適宜伝えている。

○ 今後の課題

本研究を通して、本県の児童生徒の学びに対する姿をより明確に把握することができるようになった。

特に「児童生徒の個々の学びを丁寧に見取ること」「必然性のある対話・協働学習」等、授業改善に関するいくつかの課題を把握したことで、次年度は、より具体的な取組が考えられるようになったことは大きな成果と言える。

また、推進地区や協力校の課題は、静岡県全体の課題とも極めて近い傾向があることから、今後の推進地区や協力校の取組が課題改善へ向けてのヒントとなり得ると考えている。そのため、課題をさらに焦点化した上で、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善に取り組めるよう更なる改善プランをまとめる。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

推進地区名	御前崎市
-------	------

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1)子どもたちが主体的に思考をはたかせる授業づくり
- (2)客観的データを基にした授業方法の工夫（応用・活用）
- (3)家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的な生活習慣の確立

2. 研究課題への取組状況

(1)「子どもたちが主体的に思考をはたかせる授業づくり」推進のために

①市スクラム研究会（年2回）の充実

ア 6/13 小学校スクラム研究会（浜岡北小・白羽小会場）

御前崎市授業改善テーマ「子どもが主体的に思考をはたかせる授業づくり」の視点で授業を公開・参観し、研修協議を行った。市内全小中学校教員が参加することで、子ども観・授業観を共有することができた。この研修会には池新田高校職員や幼保こども園の教員も多数参加し、つながりを深めた。

イ 10/3 中学校スクラム研究会（御前崎中・浜岡中会場）→台風のため中止

8/1 スクラム研に向けた事前研修会（浜岡中学区）では国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官中野澄先生をお招きした。学校評価生徒アンケートの結果を意識しながら指導を改善するPDCAサイクルを回すこと、実践の成果と課題を共有することの重要性をご指導いただいた。児童・生徒アンケートの「学級は安心して生活できる」と答える生徒の割合を増やすために、浜岡中学校区で同じ指標で取り組んでいくこととなった。

②授業改善推進委員会の充実

各校の研修主任を委員とし、授業改善を目的とした研修を行った（年間4回）。

第1回：各校の研修内容の確認（6/8）

第2回：奈須教授訪問指導研修会（第一小会場）参加（6/28）

第3回：全国学力学習状況調査分析結果報告（9/6）

第4回：来年度の授業改善の方向性の共有（1/15）

③協力校・第一小学校への支援

ア 教授招聘研修

- ・上智大学 奈須正裕教授 2回…市スクラムゼミナール 授業改善への御助言
- ・島根県立大学 齋藤一弥教授 1回…算数の授業改善への御助言
- ・鳴門教育大学 久我直人教授 2回…生徒指導、i-check の分析活用指導

イ 指導主事の派遣

各教授を招聘しての研修会に同行・参加し、第一小の授業課題や研修成果を共有した。また授業案作成の学年研修会に参加し、教材研究の支援を行った。

(2)客観的データを基にした授業方法の工夫（応用・活用）のために

①全国学力・学習状況調査、および標準学力調査(CRT)の活用

ア 全国学力・学習状況調査の早期対応として市内全ての小中学校で分析を行い、結果を公表した。

イ 各校の分析・考察、今後の取組を集約し、市全体の傾向等を分析してリーフレットにまとめ、各校・保護者に配布。ホームページにも掲載した。

＜保護者向けに発信したリーフレットの一部＞

今後も各校で授業改善を進めていきます。

◇第一小学校を中心に算数の授業の研究を進めていきます◇

平成30年度、31年度文部科学省学力向上の研究指定を御前崎市が受けました。第一小が中心校となり、文部科学省、県教育委員会、市教育委員会と一緒に算数の研究を進めていきます。御前崎市の算数の授業で目指す子どもの姿の一例は、次の通りです。

◎どうしたら解けるのだろう。なぜ、こういう答えになるのだろう。（疑問を持ち、自分なりの問題を明確にしようとする姿）

◎前に習った方法を使ってみよう。（筋道立てて考えようとする姿）

◎解決できたけれど、もっと良い方法はないだろうか。（より良い考えを求めようとする姿）

問題を解いて答えを出す力が一般的に重視される傾向がありました。今後は今まで以上に、子どもたちのこういった態度を重視して、日常生活でも積極的に過去の経験に基づいて問題解決をしようとする子どもたちを育てていきたいと思えます。

【具体的な取組】 ○授業改善を目的とした小学生対象の算数学力調査の実施(予定) ○研修先進校への視察
○大学教授招聘による授業研究 ○園・小・中・高校の職員合同の研究会の実施

ウ 標準学力調査(CRT)を5年生（第一小・白羽小・浜岡北小）で行い、学力に関する課題や傾向を、5年生のうちから把握するようにした。

②総合質問紙調査（i-check）と全国学力・学習調査結果のクロス集計とその活用

ア i-check を6年生（第一小）で行い、結果を全国学力・学習状況調査の結果とクロス集計して分析した。

＜総合質問紙調査（i-check）から見えてきた第一小の様子＞

●教師の指導努力で一定の安定を醸成している。

●C-C 関係で対人ストレスを感じている子どもが一定層存在している。

【必要と思われる指導】・教師からの意図的な勇気づけ、価値づけ（ボイスシャワー）

・子ども同士の相互承認の仕組みの導入（良いこと見つけ等）

・集団に馴染みにくい子への意図的な活躍の場の設定

・「失敗や間違いを笑わない」等の言葉と態度の指導⇒「支持的文化の醸成」

【第一小全体としての傾向と取組アドバイス】

- 一部の子どもがわがままで学級の規範が揺らぐ恐れを孕んでいる。
- ・教師と子どもで一点突破の協働的な規範づくり（人の話を大切に聞くこと徹底等）
⇒できたことを褒め価値付ける；組織的なボイスシャワー

イ 鳴門教育大学久我直人教授に依頼し研修会を実施した。第一小教職員に対して i-check の分析から考えられる効果的な指導方法等を御教授いただいた。

(3)家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立のために

スクラムスクール運営協議会（御前崎市版コミュニティスクール運営委員会）で学力調査結果や児童生徒の生活実態アンケート結果を公表することを通して家庭・地域における教育の大切さを周知した。園児児童生徒の基本的生活習慣の確立（早寝・早起き・朝ごはん）を推進した。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1)「子どもたちが主体的に思考をはたらかせる授業づくり」推進のために

①協力校（第一小）を中心に、市内全小中学校の授業研究参観を通して、市全体の成果や課題を明確にすることができた。

＜学校教育課が学校訪問等により分析した 7校の様子＞

【子ども】

○子どもの学ぼうとする姿勢が前向き	○子どもの自主学習力が向上している
○授業者の指示を受けて一生懸命行動する	△誰かが教えてくれるのを待つ
○自分の思いを表現できる子が多い	△自分の意見を言って満足してしまう
○学習の流れを理解している子の増加 →	○授業の約束が大事にされている
△細かい問題の答えを出し、授業者から正解と言われることに価値を感じている	

【教職員】

○学ぼうとする教職員が多い	○子どもの姿から授業を考えようとする見方が浸透
△学習内容に対して子どもたちにどのような経験や既習があるのかを把握したい	
○単元で授業を考える先生が増えた	△系統性を考えた単元構想をしたい
△授業者が本時の授業案にこだわりすぎて、子どもの気付きやつまづきを逃す	
△疑問・課題・発見等、子どもが考える前に授業者が提示する	
→ △愛情があるがゆえに、与えすぎてしまう傾向にある。	

(2)客観的データを基にした授業方法の工夫（応用・活用）のために

①全国学力・学習状況調査結果

H30 年度	国語 A	国語 B	算数(数学)A	算数(数学)B	理科
浜岡中学校区 3小学校平均	△	▲	▲	▲	▲
浜岡中学校	△	○	△	△	△

○0ポイント以上+5ポイント未満 △-5ポイント以上0ポイント未満 ▲-5ポイント未満

結果からより詳細な分析（どの問題でつまづく傾向があるか、どの資質・能力をつける必要があるか）を行い、市内の傾向を明らかにした。授業改善推進委員会で推進委員に公表し、各校での授業改善に生かすよう支援した。

②全国学力・学習状況調査結果の分析から

<全国学力学習状況調査分析結果報告（算数）>

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	全国	市	
			正答率	正答率	差
1 (1)	針金0.2mの重さと針金0.1mの重さを書く	除法で表すことができる二つの数量の関係を理解している	63	53	-10
1 (2)	針金0.4mと、0.4mの重さの60gと、1mの重さがそれぞれ数直線上のどこに当てはまるかを選ぶ	1に当たる大きさを求める問題場面における数量の関係を理解し、数直線上に表すことができる	67	53	-14
1 (3)	針金1mの重さを求める式を選ぶ	1に当たる大きさを求める問題では、除数が小数である場合でも除法を用いることを理解している	65	57	-8
2	答えが $12 \div 0.8$ の式で求められる問題を選ぶ	小数の除法の意味について理解している	40	34	-6
8	200人のうち80人が小学生のとき、小学生の人数は全体の人数の何%かを選ぶ	百分率を求めることができる	53	38	-15

【分析】・「1に当たる大きさ」をとらえることに課題

- ・数値を単純化する考え方や数量関係を図に表すことを有効だと思っていない。
- ・「1つ分」×「いくつ分」＝「全体の量」のかけ算の考え方を基に、「1つ分」や「いくつ分」を求める割り算ができることを統合的に考えることができていない。
- ・既習事項をもとに考えるよさに気付いていない。・算数を学ぶよさを味わう必要がある。

学力学習状況調査結果やi-checkの結果から、本市の実態として児童生徒自身では克服することが困難である学力定着に関する課題を抱えている。そのため、本市の授業のとらえが「基礎基本を定着させる」ことに重点をおいた展開になっていることが明らかになった。それは、教師の「どの子にもわからせたい」という子どもへの愛情によるものである。基礎基本を押さえるあまり、問題を解くことに重点をおく授業（教科スキルが身についたか、のみを求める授業）になる傾向があることがわかった。これからの学習指導要領が求める、資質・能力を身につけるためには、現状の授業ではかなわないことが明らかになった。そこで、次年度の御前崎市授業改善テーマを、

「育成すべき資質・能力を明確にした〇〇科授業づくり」

と設定し、各校の授業改善支援にあたることとした。

(3)家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立のために

①「早寝・早起き・朝ごはん」推進のための朝食摂取アンケート結果から

	平成 30 年	6 月	12 月
【園 5 歳児】	食べた	96.1%	98.5%
	食べない	3.9%	1.5%
【小学校 5 年生】	食べた	96.8%	99.1%
	食べない	3.2%	0.9%
【中学校 2 年生】	食べた	93.6%	95.7%
	食べない	6.4%	4.3%

- ・年 3 回、5 日間調査を市内 9 園、5 小学校、2 中学校で実施した。
- ・全ての学年で朝食を食べて登校登園する子どもの割合が上昇。
- ・園、学校の家庭への積極的な啓発が行われた。教員の意識向上と各家庭の基本的生活習慣に対する意識向上が見られた。

- ・全国学力・学習状況調査と基本的生活習慣の関係を発信したことで、学力と生活に深い関連があることを、保護者が理解しつつある。

4. 今後の課題

(1)「子どもたちが主体的に思考をはたらかせる授業づくり」推進のために

- ① 現在の授業では、新学習指導要領が求める資質・能力を身に付ける授業となっていないことが明らかになった。成果にも明記したが、子どもたち全員が「わかる」ために、基礎基本を重視した授業（コンテンツをいかに身に付けさせるか）に偏ってしまっている現状がある。今後は「本時の授業はどんな資質・能力を身に付ける授業か」「この単元はどんな資質・能力を身に付ける単元か」学習指導要領に則り、授業者が明確に目指す子どもの姿をもって授業を展開する必要がある。また、「本当にこの力が付いたか」等シビアに個をみとる必要がある。そこで以下のとおり取り組む。

ア 市スクラム研究会（年 2 回）の充実

- ・小学校スクラム研究会を、本指定研究の第一小学校の発表会と兼ねて行う。教職員が当日の授業を「算数の資質・能力が子どもに身に付いたか」という視点で、子どもの姿を根拠に協議できるようにする。
- ・池新田高等学校スクラム研究会では、単元を通して身に付ける資質・能力を明確にした授業が展開されているかを視点に、中学校・高等学校の教員が共同して研修・授業公開を行う。事前の研修会では、市内中学校教職員が、高等学校の授業内容と小中学校の系統性について情報提供をする。その際、資質・能力の系統性について触れ、授業構想に取り入れるよう市教育委員会として支援する。

イ 授業改善推進委員会の充実

ウ 協力校 第一小学校への支援

- ・指導案作成の段階から、校内研修に参加し、単元を通して身に付ける資質・能

力の視点から授業づくりを支援する。授業改善の方向性を確認していく。

(2)客観的データを基にした授業方法の工夫（応用・活用）のために

①全国学力・学習状況調査の活用

ア 全国学力・学習状況調査の分析が表面的で、深いとらえができてない。

なぜ、問題を解くことができたのか、また、できないのかについて市の傾向を分析し、どのような授業を展開すべきか、具体的に支援する。

イ 新学習指導要領と全国学力・学習状況調査のつながりが十分理解されていない。

この問題がどのような資質・能力を図る問題として設定され、市の結果から、どのような資質・能力が身に付き、未だ課題があるのは何かについて分析する。

②総合質問紙調査（i-check）の活用

ア 客観的データを学級経営に生かすことが本年度は不十分であった。次年度は、各学校において、結果から不安定要素に対する手立てを打ったり、具体的手立てに対する表れを確認したりできるよう、事前・事後の支援を十分に行う。

i-check の結果の分析を、学級や学年経営 PDCA サイクルの「C（チェック機能）」として活用し、「A（改善）」「P（次の計画）」へつなげ、よりよい「D（取組）」となるようにする。

(3)家庭地域を巻きこんだ児童生徒の基本的生活習慣の確立のために

スクラムスクール運営協議会の発信で「早寝・早起き・朝ごはん」から「朝食摂取」「学力と基本的生活習慣の関係」について意識は高まった。しかし、「早寝・早起き」に大きく影響を与える「家庭での時間の過ごし方」はまだ十分な価値がおかれておらず、各家庭で子ども任せになっている現状がある。スマホの使用時間や、SNS の活用状況など、平成 31 年度は、小中学生のインターネット利用状況調査を基に問題点を洗い出し、「早寝・早起き・朝ごはん」をさらに推奨し、生活習慣の改善を進めていく。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	静岡	番号	22
-------	----	----	----

推進地区名	熱海市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- ・子どもがなりたい自分の姿を目指し、主体的に追究し続け、表現することができる力の育成
- ・教師がこれまでの教育実践を大切にしながらも、将来を生きる子どもたちのために、授業改善し続ける教師集団の育成

2. 研究課題への取組状況

(1) 学力・学習状況・生活習慣について分析し、伝える

学力等についての現状を把握して分析するために、学力学習状況調査後「熱海市全国学力・学習状況調査検証委員会」を開催した。今年度の結果を分析し、具体的な課題と市内共通の授業改善の視点をリーフレットにまとめた。リーフレットは、ホームページに掲載し、市内小中の保護者に配布した。生活習慣の改善から自主的な学習への意識付けなど家庭地域への取り組みの啓発活動を行った。

(2) 授業改善に向けての学校支援

市教育委員会の学校訪問時に指導主事が研修主任と面談し、研修推進における状況を随時確認しながら校内研修体制のあり方について助言した。各校の校内研修の独自性は認めながらも、新学習指導要領への授業改善への取組の方向性に向けて具体的なサポートをした。

(3) 「学び続ける教師のチェックシート」の実施と市内全学年の学力把握

静岡県教員育成指標に照らし合わせた「①授業力②生徒指導力③業務遂行力や組織運営力」の3観点で自己評価を行い、教師の資質向上の視点として分析を行った。同時に年代別の結果を出し、若手教員からベテラン教員までの傾向を探った。また、学力向上を市内全体で捉えるためにも、各校共通で行っている定着度調査等の結果を市で確認した。

(4) 市内小中学校の連携を深め授業力を高めよう

ア 協力校(第一小)への支援

県教育委員会サポートチーム派遣として、静東教育事務所の指導主事による指導を依頼した。協力校での研究授業を参観し、その授業で付けたい力と授業構想の視点を基にした授業づくりへの指導・助言をいただいた。また、静岡大学の村山教授にも講師として招聘し、今後の授業改善の方向性などを御示唆いただいた。

市教育委員会指導主事も授業参観を行い、授業のねらいや目標設定等について助言した。また、次年度の教育課程編成研修の中で学力支援についての部会に出席し、研修の方向性を検討、協議した。

イ 熱海市学力向上委員会

- ・ 第一回・・・各校研修主任を対象に、これまでの静岡県学力向上推進協議会および学力向上連絡協議会の内容について伝達をした。また、市内小中学校の学力における課題を中心に分析し、授業改善の必要性について説明した。
- ・ 第二回・・・各研修主任が自校の授業研究を振り返り、グループワークを通して各校の研修での課題を共有化した。また、協力校である第一小学校の研修主任が今年度の研究の成果と課題について報告を行い、授業改善に向けての情報を発信した。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力学習状況調査の結果

全国の平均正答率と熱海市の平均正答率を比較した。

◎高い：+3ポイントを上回る ○やや高い：+1から+3 同じ程度：±1ポイント以内
△やや低い：-1から-3 ▲低い：-3ポイントを下回る

実施年度	校種	国語A	国語B	算数数学A	算数数学B
平成 26 年	小学校(全国比)	◎	◎	◎	○
平成 27 年	小学校(全国比)	◎	○	◎	◎
平成 28 年	小学校(全国比)	○	○	同じ程度	同じ程度
平成 29 年	小学校(全国比)	▲	△	△	△
平成 30 年	小学校(全国比)	△	同じ程度	○	同じ程度
平成 26 年	中学校(全国比)	同じ程度	△	同じ程度	同じ程度
平成 27 年	中学校(全国比)	同じ程度	○	同じ程度	○
平成 28 年	中学校(全国比)	同じ程度	○	同じ程度	△
平成 29 年	中学校(全国比)	○	○	◎	◎
平成 30 年	中学校(全国比)	同じ程度	○	同じ程度	○

ア 教科別調査結果より

平成 30 年度は、小学校において、国語 A B、算数 A B とも前年度より上向き傾向にあったが、全国の平均正答率と比較すると、国語 A で、課題が見受けられる。一方中学校においては、前年度に比べるとやや下向き傾向にあるが、全国と比較すると、全てにおいて上回っている。

この結果から全体としては、やや改善傾向が見られる程度で、市内全体としては、更につけたい力を明確にした授業改善が図られなければならないと考えている。

「熱海市全国学力・学習状況調査検証委員会」では、以下のような意見が出た。

<小学校>

- ・漢字の正答率が低かった。ただ書くだけではなく、生活の中で漢字の力を高める必要が確認された。
- ・「時間が足りない」と答えた子が全国平均を上回っているため、単に最後の漢字の問題にたどり着かなかった子も多かったのではないかと。短時間に文章を読み取る力が課題なのではないかという意見が、算数と共通で出された。

<中学校>

- ・目的意識を明確にした文章を限られた文章にまとめることが課題である。
- ・グラフや表などの事象を数学的に解釈し、自分なりの考え方で説明することが課題である。

<小中共通>

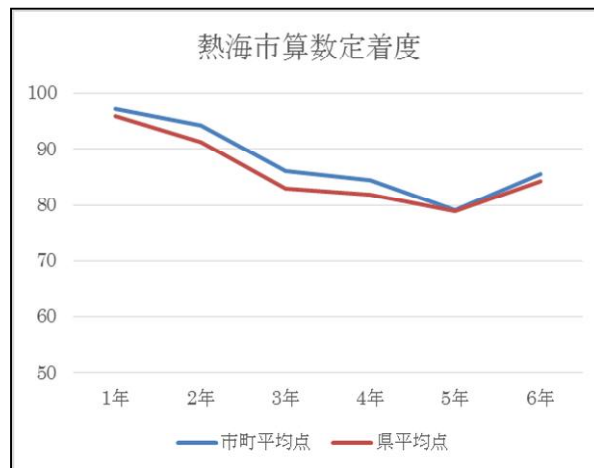
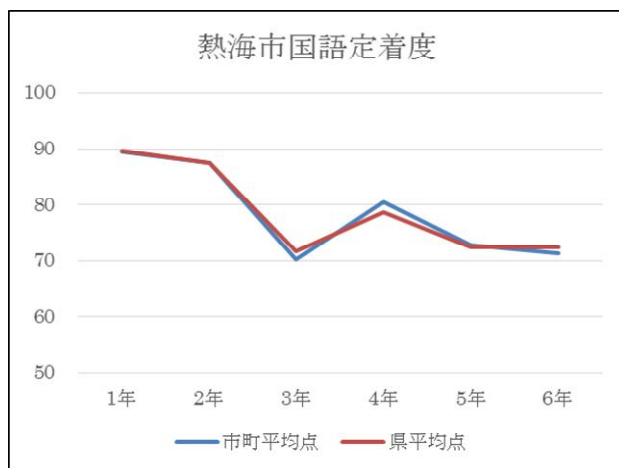
- ・授業中に友達と話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができるかと答えた子どもの割合が多い。

という意見が上がった。また、小中共通で問題に対する「時間」が課題としてあげられた。様々な問題に対して対応する力が不足しているため、多様な問題に対応できるよう授業で取り上げていかねばならないと考えている。どの授業においても、話し合い活動を通して自分の考えを伝えることができると答える子どもの割合が多いことから、自分の考えを伝える場面より、多様な考えを整理したり、分類したりして論理的に考えることに課題があるのではないかと考えることができる。

学年ごとの課題の特質もあり、「時間内に読み取る力」や「自分の考えを説明する力」は、全学年で対策が練られるべきだと考えられた。

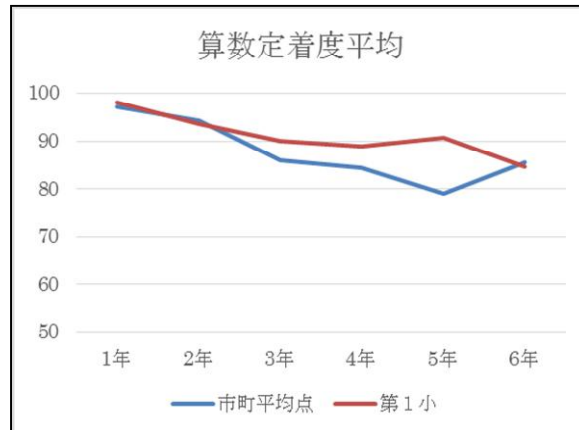
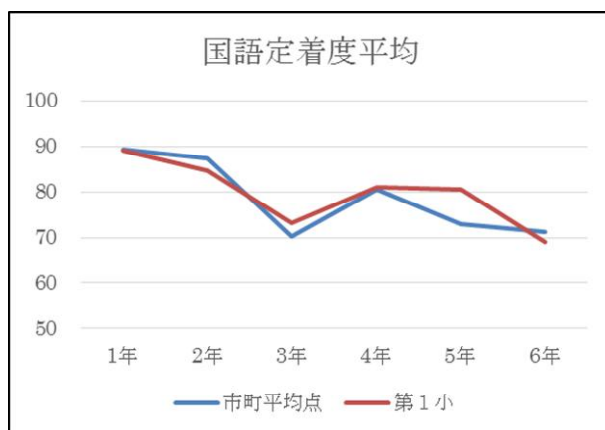
イ 市内小学校6学年の学力の状況

小学校1年生から6年生までの学力推移の動向を確認するために、毎年行っている定着度調査を市内で把握し、学年ごとの傾向を探った。（県の平均も比較として載せた。ほぼ同じような傾向であった。）



この結果から、国語に関しては、小学校2年生から3年生への落ち込みが大きいことがわかった。これは、教科書の文章量・情報量ともに増える3年生にかけての読解指導に課題があるのではないかと考えられる。また、算数においては、2年生から3年生、4年生から5年生にかけて平均点が下がるのは、学習内容が分からない問題が増えるのではないかと推測された。

協力校である、第一小学校に関しては、昨年度よりこの視点に着目し、特に文章量が増える3年生と、割合の考えが算数で増える5年生で、学習内容がよくわかるよう工夫した授業に心がけた。次のグラフのように2年生から3年生にかけてと、4年生から5年生にかけて市内の平均ほど落ちこみがない。この結果をもとに、今後、市内全体に周知し、高学年だけでない全体としての取組を考えていきたい。



ウ 「学び続ける教師のチェックシート」からの検証

- ・ 7月から12月のチェックシートから「①授業力②生徒指導力③業務遂行力や組織運営力」の3観点全てで自己評価が高まっていることがわかった。
- ・ 年代別では、年代が上がるに従ってそれぞれの資質・能力を高めることに意識していることが確認された。
- ・ ①授業力においてベテラン教員ほど教材研究時間が十分に取られていることがわかった。若手教員の研修時間確保が課題であると確認された。
- ・ ②生徒指導力では、若手教員に「保護者との信頼関係」「迅速な初期対応」で課題が見られた。また、生徒指導と授業力に相関関係が見られた。
- ・ ③組織運営力では、ベテラン教員と若手教員の相互作用が必要であることが分かった。特に、IT機器の活用に長けている若手教員と経験が豊かなベテラン教員がチームとして対応していくことで、様々な教育課題に対応していけるのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

研究協力校の第一小学校においては、どの学年においても「論理的に考えることを楽しむ授業」という視点で研究発表をしてもらった。特に基礎的な学力に関して4年生から5年生の落ち込みがないように「数学的な思考を個々の意味理解に沿う」ように研修を重ねてもらった。一人一人の論理的な思考力を高める取り組みが結果につながっていることも上記の結果から分かる。ただし、全国学力・学習状況調査においては、知識理解に関する問題も活用に関する問題も課題が見られる。論理的に考え、分かりやすく説明するなどの論理的説明力を育むことを課題としたい。

次年度は、協力校の実践を継続して市内全体に発信していくことで、市内の各小中学校全ての学力向上につなげたい。特に、学年が上がるに従って、市内全体としてどこに課題があるのかを検証したい。また、「全国学力・学習状況調査リーフレット」を使って、これまで以上に地域と保護者への周知を図り、熱海市全体で子どもたちを育むよう今まで以上に働きかけたい。

引き続き、校内研修における授業改善の支援体制を強化し、熱海市の子どもたちが「主体的に学ぶ授業づくり」と子供たちの「知識や情報を活用しながら考えをまとめ、表現することができる力」を育てていきたい。

この研究を通して、教師一人一人が授業改善に意欲的に取り組み、より高い資質・能力につながる学び続ける教師集団の育成を各学校単位で切磋琢磨してくれることを望みたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県市名	静岡県	番号	22
--------	-----	----	----

○ 協力校として実施した取組内容

1 当初の課題

かつて、生徒指導困難校とも称された本校であるが、数年間にわたる丁寧な指導の積み重ねにより、児童が学習に集中して取り組むことができるようになってきている。とはいえ、一人親家庭や外国にルーツをもつ家庭、貧困家庭などのハンデを抱えた児童が25%近く在籍しており、自尊感情の低さが目立つ。すべての子どもたちの学習意欲を引き出し、継続させていくことは大きな課題である。そうした中、全国学力学習状況調査の平均正答率では、国語、算数共に県・全国平均を大きく下回っており、正答数の分布も全体的に低い方に分布している。この状況はここ数年続いているものである。また、国語・算数ともに記述式問題での誤答率や無答の割合がきわめて高かった。「情報量の多さに対応できない。」「問題文や資料を理解できず、あきらめてしまう。」「言葉や式を使って書く、自分の考えをまとめて書く力がついておらず、回答が不十分なために、誤答になってしまっている児童も多い。」という状況がうかがえた。

また、児童質問紙の結果によると、「算数の勉強が好き」「算数の勉強は大切だと思う」と答えた児童は県平均と同等だが、「算数の授業内容がよく分かる」「新しい問題を解いてみたいと思う」「わからないときにあきらめずにいろいろな方法を考える」と答えた児童の割合は、すべて県平均に比べて5～7ポイント低い。

全国学力学習状況調査正答率 平成30年度結果

	国語A	国語B	算数A	算数B
全国	70.7	54.7	63.5	51.5
静岡県	69	56	63	51
第一小	58	43	49	36
全国比	-12.7	-11.7	-14.5	-15.5

県定着度調査の算数においても、下のおりである。

同集団での県との比較							
算数	平成29年度学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
平成29年度		-0.1	-4.2	+1.4	-4.3	-7.4	-8.2
平成30年度学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
平成30年度	0	-5.5	-1.3	+4.2	-1.2	-15.6	

このことから、本校の子どもたちは、授業にまじめに取り組むようになったが、学力定着には課題があることがわかる。

これまで、本校では市の授業改善テーマ「子どもたちが主体的に思考をはたらかせる授業づくり」を受け、算数科を窓口とした3年計画の研修を進めてきた。考える必要感のある魅力的な学習問題を子どもたちとつくることで、主体的な学びの姿が増え、意図的な交流の場を工夫して取り入れたことで、自分の考えを説明できる子が増えたなどの成果がある。反面、知識・技能の活用や、

学習の定着が課題である。

2 協力校としての取組内容

算数科を窓口とした授業改善を中心に、自尊感情を高める学級づくりなど教育活動全体で研究を推進してきた。

(1) 校内研修の充実による授業改善

全員が、少なくとも1回以上の授業公開を行うことに加え、学年部ごとの中心授業を通して、ねらいに迫るための手立ての工夫や、説明する力の育成を研修した。御一小授業10や、授業設計診断活用など、学年部研修の充実により、職員からは「たくさんの授業を見て学ぶことができた」「研修が充実していて勉強になった」といった手ごたえがあった反面、「学年の積み上げが必要」「いろいろなことをやったが、全体としてもやっとしている」「共通理解が必要」などの反省も多い。この課題については4で詳しく述べる。

公開授業後は、KPT法で振り返りを行い、研修だよりの発行により全職員で共有するようにした。また、御前崎市スクラムゼミナール講師による指導を受け、めざすべき方向性と課題を共有した。

本校の授業づくりの課題

- コンテンツを指導する意識から抜けられない
→コンピテンシーを育成する授業へ
- 単元構想が弱い

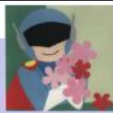
上記の課題を解決するために、職員からの「立案段階での助言がほしい」というニーズに対し、県サポートチーム講師を招聘し、事前研修の中で疑問を解決することができた。

また、牧之原市立相良小学校、川崎市立川崎小学校など、本校がめざしたい先進校の研修会に複数の教員で参加し、そこで学んだものを共有する時間を設定した。取組の中で本校の研修に取り入れたいものが提案され、研修推進委員会を中心に、実践した。

加えて、村山県学力向上推進協議会長による学校訪問で、公開授業を通し、改善すべき点について助言を受けた。

こうした研修の過程で職員からは、「内容ベースから、資質能力ベースの授業に転換していく必要があることはよくわかったが、具体的にどんな授業をめざせばいいのか研修したい」という職員の声を受け、齊藤一弥教授による実演提案授業を全職員で参観した。その後の講話を通

御一小 授業10



- 1 はじめと終わり(45分間)を守る。
- 2 はじめと終わりのあいさつをしっかりする。
- 3 学習問題は 赤枠で囲む。
- 4 学習のまとめは青枠で囲む。
- 5 ねらいや板書計画をもって授業に臨む。
- 6 子どもが考えをつくる時間を適切にとる。
- 7 子ども同士の「かかわり」の場面を設定する。
- 8 定着につながる場を設定する。
- 9 ICT・具体物・ネームプレート・ワークシート等を活用する。

10

研修だよ!
「説明する力」をほし、「わかる・できる」へつながる授業づくり

3年2組 算数「ひたひた分けられない時はどうしたらいいかな(あまりのあるわり算)」(6/28 スクラムゼミナール)



視点
掲示した算数用語や問題文の挿絵、具体物、既習事項の掲示が、子どもたちが説明することに有効だったか。

Keep 【成果・続けたいこと】	Problem 【課題】
<ul style="list-style-type: none">○りんごご箱の具体物を用意したことは、子どもたちが思考を働かせ、説明するために大変効果的だった。○既習事項や算数用語の掲示を意識して、説明する際に活用しようとする子どもが増えた。○書画カメラで自分の考えをテレビに映すことは、説明する側、聞く側の両者にとって大きな助けとなった。○ホップ・ステップ・ジャンプの流れは、本時だけでなく単元を通してやってきたことで、子どもたちも見通しをもって問題に取り組めた。	<ul style="list-style-type: none">▲教材研究の時点で、本校で扱っている教科書だけでなく、他の教科書会社の扱っている問題を把握し、その上で授業を組み立てる。▲子どもたちの考えを最終的にどこに「おとす」のかについて、明確にしておく。▲除法の検算を検算として扱うのではなく、あまりのあるわり算の解き方の一つとして考えること。→わり算表現をかけ算表現にする。▲「1/2分の数」「1/3分の数」など、具体化された数を抽象化する習慣をつける。▲今日つけたい方に直接関係ない部分は、子どもたちに考えさせずに教師が年々、スムーズに授業を展開する。

Try 【今後チャレンジしたいこと】

- ・他社の教科書も参照する。→問題の扱われ方、解決へのアプローチの仕方を検討することで、単元や問題の本質的な理解を深める。
- ・単元を通じて、具体化→抽象化を常に意識した授業展開を図る。
- ・つけたい力のために「目標」と「まとめ」を明確にする。
- ・Keepのポイントを今後も日常的に継続していくこと。

し、資質能力ベースの授業について理解が深まった。

(2) 学びの土台づくり

子どもが主体的に学び、思考する授業の土台づくりを全校で足並みをそろえて取り組んだ。家庭的なハンデを抱える児童が多いからこそ、筆入れの中味をそろえる、もちものをそろえる、など環境を整える取組は必要不可欠なものである。授業を担当するすべての教員が同一歩調で指導できるよう、学びの構えや自分からノートについて、詳細なマニュアルを作成した。また、これらを児童向け、保護者向けにも作成し、共通理解を図った。

「えんぴつピン」や「自分からノート」「ほメッセージ」の取組が児童、保護者に定着しつつある。年2回の全校ノート展を開催し、児童や保護者の意欲が持続できるようにした。



H30 家庭学習の手引き（保護者版）

御前崎第一小学校

家庭学習の目的は、1「授業の復習予習をして、学習内容を習得する。」
2「自分から学ぶ習慣を身に付ける。」

自ら学ぶ習慣を身に付けることが、一層の学力向上の土台になるものです。学校と家庭が協力して、子どもたちの学力、学習意欲を高めていきたいと思えます。家庭での学習の仕方を振り返り、「家庭学習のやり方」と「保護者の皆様へのお願い」を参考に取組んでいただきたいと思います。

1 保護者の皆様へのお願い

①学年に合った学習時間の確保

低学年・・・30分以上
中学年・・・45分以上
高学年・・・60分以上

②学習する環境づくり

- テレビは消して、机の上を整頓し、集中できる環境を作りましょう。
- 勉強する場所を決めましょう。
- 同じ時間に学習すると、家庭学習が習慣化されます。

生活サイクルの中で、どの時間に学習するか、相談して決めましょう。

③学習の順序

- 宿題（本読み・漢字ノート・計算ドリルなど）
- 自分からノート
- 次の日の準備（えんぴつピン・持ち物の準備）

筆箱の中身について

筆箱は、6年間同じものを大切に使います。
(破損した場合は同じ形の物を個人購入して下さい。)

- 鉛筆 B か 2B 以上の鉛筆 5本（無地）
- 赤青鉛筆
- 線引き（1.3～1.5cm・イラスト無し）
- よく消える消しゴム（白の無地）
- マイネームペン（油性）

④「ほメッセージ」で学級アップ

子どもが学習したものには、必ず目を通してください。

- 1年生から3年生は、○付けをお願いします。
- 「自分からノート」や学習カードなどに、ほメッセージをお願いします。

短くても褒め言葉や励まし言葉が、どの子どもでもうれしいものです。「またがんばろう！」とやる気が高まります。

(例) 「いいね!」「がんばってるね。」
「絵があつてすごくわかりやすいよ。」
「苦手なところの復習大切だね。」
「今日はアナウンサーみたいなお読み方でよかったよ。」など

(1) 5つの構え

文責 田宮 ねらい

落ち着いた空気の中で、集中して授業に取り組めるようにする。

1	1の付く日は、えんぴつピン(1・11・21日)
2	背すじピン
3	チャイム着席
4	始めと終わりのあいさつ
5	授業の準備は休み時間

★学習カレンダーを教室に掲示
★えんぴつピンの日は、カードに担任がチェックし、学習委員会が集める

◇学習用具について◇

①共通理解事項

【筆箱の中身】

- 鉛筆 B か 2B 以上の鉛筆 5本（無地）
- 赤青鉛筆
- 線引き（1.3～1.5cm・イラスト無し）
- よく消える消しゴム（基本的には白の無地）
- マイネームペン（油性）

【算数セット】
3年生以上

- 三角定規
- コンパス
- 分度器

【学習用具の約束】

- すべての持ち物に、名前を書く。
- 筆箱は、6年間同じものを大切に使う。(破損した場合は同じ形の物を個人購入する。)
- 全学年、シャープペンは使用しない。
- 鉛筆は毎日「鉛筆ピン!」。削り忘れたら、朝8時までに削る。

その他

- 書写で使った筆は、学校では洗わず持ち帰る。
- 書写の練習用紙や新聞紙は、持ち帰る。ゴミは最小限にする。
- 忘れた時のノートやドリル類の事務室でのコピーは控える。
- 長期休業の生活表に持ち物チェックリストをつける。

(3) 児童の現状と課題把握

6月に、総合質問紙調査 i-check を全校で行った。夏休みの職員研修において、結果分析を行った。検査結果を元に、学級の特長や配慮すべき児童を客観的な視点で把握し、2学期からの学級経営に活かすようにした。また、同調査を11月にも再度実施し、変容や配慮児童について情報を共有した。また、次年度の学級編制に活かしていく。さらに、本調査で得られた個人向けメッセージを配付し、一人一人の意欲向上も図った。

同時に、算数の標準学力調査を5年生対象に実施し、教員が単元ごとの理解度を把握し、授業に活かした。

3 取組の成果の把握・検証

(1) 児童の自己評価

「めざす授業像に向けて精一杯取り組んでいる」と回答した児童は85%、「算数の授業で、自

1 学校評価の変遷		児童の評価			
	(%)	学級は楽しい	学級は安心して生活できる	学校は楽しい	
平成 24年度	69				
平成 29年度		90		93	
平成 30年度		91		92	
	(%)	できた! わかった! が増えた	授業がわかる	授業をつくらうとした	授業に精一杯取り組んでいる
平成 24年度	66			54	
平成 29年度			85		86
平成 30年度			90		85
	(%)	自分の花がわかる			※まったく同じ評価項目ではないため、同様のものと比較しました。
平成 24年度	66				
平成 29年度	74				
平成 30年度	76				

分の力で問題を解こうと、一生懸命考えている」と回答した児童は94%であり、学びの土台づくりは進んでいる。また、「授業がわかる」と回答した児童の割合が平成29年度に比べて5%増えた。

これは、校内研修テーマを「わかる・できる」へつながる授業へと切り替え、職員も「わかる・できる」を意識して取り組んできた成果だと言える。

(2) 保護者の評価

保護者アンケートから、児童の学習や学校の取組への関心が高まっていることがうかがえる。

	(%)	我が子の授業の話を知っている	我が子の家庭学習を見ている	我が子の良さを見つけほめている	相談できる先生がいる
平成30年度		82	80	91	98

(3) 外部評価

教育委員会の学校訪問、学校評議員会等では授業について次のようなコメントをいただいた。

- 授業に様々なものが用意され、興味をもたせ、のめり込ませている。(具体物・ICT機器の活用等)
- 子どもの活気や温かさを感じる。先生達の子どもと一緒に授業を創ろうという意識や子どもの目線まで下げる姿勢が信頼感を得ている。

(4) 教員の意識、課題

- 学年研修がとても充実していた。
- 多くの授業を参観でき、自分の授業力向上につなげることができた。
- ▲学校全体で、児童に積み上げができるような研修にしていきたい。

4 今後の課題

今年度の取組では、数値的な部分での児童の学力に大きな変化は見られていない。

しかし、本校の授業改善の方向性や成果・課題を全職員で共有することができた。課題として次のようなことが明らかになった。

◆内容ベースから資質ベースへの授業転換が必要である。

授業者に「できるだけわかりやすく」「苦手な子を取り組みやすいように」との意識が強く、丁寧に指導するあまり、「子ども主体」と言いつつ実際には教師主導の授業になってしまっていた。また、一つ一つのコンテンツを教えてしまうことに終始しがちであった。

活発な発言≠よい授業≠力をつける授業 という意識転換も必要である。

◆授業転換を支える単元デザイン力が必要である。

授業者が、数学的な見方・考え方や資質・能力についての理解を深め、単元全体を組み立てていく単元デザインを研修していく必要がある。また、児童が自分たちで課題を解決する授業はできているが、授業者がその時間にどこまでをできるようにするのか、一人一人の学びを正確にみとる部分が弱い。どの子も取りこぼさないためにも、つけたい資質・能力が身に付いたかわかる評価についても研修していく。

九九や計算カードなどある程度の反復練習が必要なものがあることは事実であり、そこにハンデを抱える児童も多く在籍している。そこで、3学期から、学校支援地域本部と連携し、地域ボランティアに毎週水曜日に来校してもらい、反復が必要な児童への対応をお願いしている。

職員の中には「これまでの丁寧な指導の積み重ねにより、児童の学ぶ姿勢が向上した」という成功体験があり、このことがともすれば「学力定着にはもっとドリルなどの練習が必要」との意見になりがちであった。

内容ベースから資質ベースの授業転換について、全員の足並みをそろえ、実現させていくことが平成31年度への課題である。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	静岡県	番号	22
-------	-----	----	----

協力校名	静岡県熱海市立第一小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

全国学力・学習状況調査結果の分析を受け、国語では「決められた時間の中で文章を読みとること」等に、算数では「小数と分数の意味理解」「数学的な考えを要する問題」等に大きな課題があり、改善を図る手立てを重点的に講じる必要があると考えた。

また、全学年の学習定着具合を確認する平成29年度のテストの結果では、国語は県平均を上回る学年と下回る学年が半々であった。下回るのは、低学年に多かった。算数は、全学年で県平均を上回った。

これらの結果を踏まえ、確かな学力を育むために実践してきた本校の研修を再度検証し、授業改善につなげる必要がある。また、無答が多いことへの対応も急務であるとする。

【全国学力・学習状況調査における全国平均と本校の比較】

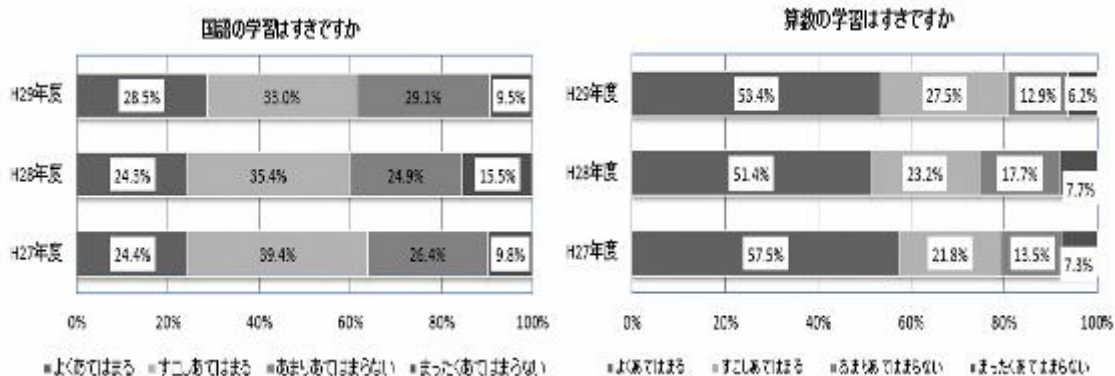
全国の平均正答率と本校の平均正答率を比較し、

◎高い：+3ポイントを上回る ○やや高い：+1から+3 同じ程度：±1ポイント以内
△やや低い：-1から-3 ▲低い：-3ポイントを下回る

実施年度	国語A	国語B	算数A	算数B
平成26年	◎	◎	◎	△
平成27年	◎	同じ程度	○	○
平成28年	○	△	▲	同じ程度
平成29年	▲	△	▲	△

児童質問紙での「国語・算数の学習が好きか」という問いに対し、どちらの教科も好きと答える児童が多いことから、学ぶ意欲の高さがうかがえる。さらに勉強が好きといえる子どもが増えるよう、学びの実感が得られる授業を展開していきたいと強く感じる。

[子どもアンケート結果]



また、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか」という問いに対して、「当てはまる」と答えた子どもが多いことから、友達との対話を通して、深い学びにつなげ、それが学びの実感にもつながる可能性を秘めていると捉えている。

これらの結果から、確かな学力を育むために実りのある授業実践を行い、学びの実感につなげられるようにしなければ、学ぶ意欲が低下してしまうのではないかと危惧する。そのため、県の教育事務所や熱海市教育委員会等のサポート機関を効果的に活用しながら、今一度授業を捉え直して、付けたい力を明確にし、子どもを育てることにつながるよう授業改善をし続けることで、教師の力量を高めていく必要があると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 全国学力・学習状況調査、定着度テストの活用

①国語の課題「決められた時間の中で文章を読みとる」



学力調査の結果から、本校の子どもは、読むことに時間がかかりすぎ、短時間で全体の概要をつかむことを苦手としているととらえた。そこで、読書に力を入れるとともに、毎週金曜日の朝の15分間、スキルアップタイムという時間を設定した。時間設定ぎりぎりで読めると思われる文章量で行うミニテストである。全校で一斉にはじめ、学びのスイッチが入る瞬間となった。

②算数の課題「小数と分数の意味理解」「数学的な考えを要する問題」

算数では、苦手としている単元や考え方が顕著だったため、そこを重点的に授業改善をしていくことを行った。それぞれの学年で押さえなければならないことは何か、また、押さえるために不可欠な問いや支援をどのようにすればよいのか、全職員で考えることにした。

(2) 確かな学力を育むための授業実践



確かな学力を育むためには、子どもが主体となって、一生懸命に考える授業をしていくことが大切であると考えた。そこで、校内研修で取り上げ、学校体制で「論理的に考えることの楽しさを感じる授業」を目指した。

① 6年「分数のかけ算」の授業から

「論理的に考えることの楽しさを感じる授業」にするため、授業者は、子ども同士の対話を活発にしたいと考え、各グループに iPad を1台用意し、参考となりそうな考え方が書かれているノートの画像を送信したり、ホワイトボードの活用を促したりした。



授業では、自分の考えを述べながら聞いている子どもの理解を確かめたり、ホワイトボードに分かりやすく書いて説明したりしていた。自分とは異なる考えを取り入れようとする子どもの姿が見られた。

また、本校では、多面的・多角的に考える姿を大切にしている。一人でいくつもの考え方をを見つける子ども、友達と関わることで多様な考え方に合う子ども、授業によって、その形はさまざまである。「論理的に考えることの楽しさを感じる授業」では、その子なりの考えを引き出すこと、多様な考えを共有すること、異なる考えを取り入れることを意識して授業改善を進めてきた。

論理的に考えることの楽しさを感じる授業の実現に向けて

- ・その子なりの考えを引き出すこと
- ・多様な考えを共有すること
- ・異なる考えを取り入れること



② 4年国語「ごんぎつね」の授業から

「教材を包み込む大きな課題」を設定することで、時、場所、人などの設定や心情など、物語文における読みの要素を子どもが自ら読み進めていくことができると考え、単元構成を見直した。場面ごと丁寧に読むのではなく、「友達との話し合い」を通して物語を何度も読み返すことが、学びに向かう姿や学ぶ姿の高まりにつながるのではないかと考えた。

国語科では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成することをめざしている。読むことについては、それぞれの学年で指導すべきことが言語活動例とともに、指導事項としても設定されている。本校の研修で取り組んだ国語の授業は「読解力」を高めるための1つの形を探ったものであり、1年間の全ての授業をこのようにしていくというものではない。



③校内研修のもち方

子どもに学力を付けるためには、授業が大切となり、教師の力量も問われる。教師一人一人の力量形成には、「活用力」（見たこと、聞いたこと、考えたことを自分だったら、自分の授業だったらと自らに置き換え、実践（活用）、評価、改善していく力）を高める必要があると考えた。

事前研修と研究授業、事後研修は全員参加で行う。一般的な事前研では、一つの授業の形を見出していくことが多いが、本校では、全員が本時の構想を考えて事前研を迎え、一人一人の授業観を伝え合う。つまり、すべての教師が研究授業の構想を立てる。

「この授業で1番大切にしたいことは何か」のもとに出された意見を参考に、授業者は構想を練り直して研究授業に臨む。参観者は、目の前の子どもの姿を通して、自分の授業観を捉え直し、授業者のためだけになりがちな授業研究が、全教師のためのものとなる。参観者としてではなく、自分ならどのように授業を構成するのか、目の前の授業を自分の指導のどこに活かすのか、一人一人の教師の活用力を高める場所として授業研究がある。そして、授業を通して見つけた子どもの姿、手立ての有効性を共有し、その積み重ねを全職員で行った。

事後研修は、「論理的に考えることの楽しさを感じる子どもの姿」を視点にグループで話し合いを行い、全体で共有するという形で進めてきた。「他人事」ではなく、「自分事」として捉え、学ぶため、国語、算数の授業研究を終えた後には、活用報告書の作成を教員一人一人に求めた。

〔事前研用個人レポート〕



〔事後研修の様子〕



(3) 多面的・多角的に授業を問い直すためのサポート体制の構築

主体的・対話的な深い学びができる授業を目指し、校内研修を通して考えることの楽しさを味わう授業づくりをしてきた。しかし、自分たちの考えが閉塞的にならないように、多方面の方々から助言をいただくよう心がけてきた。

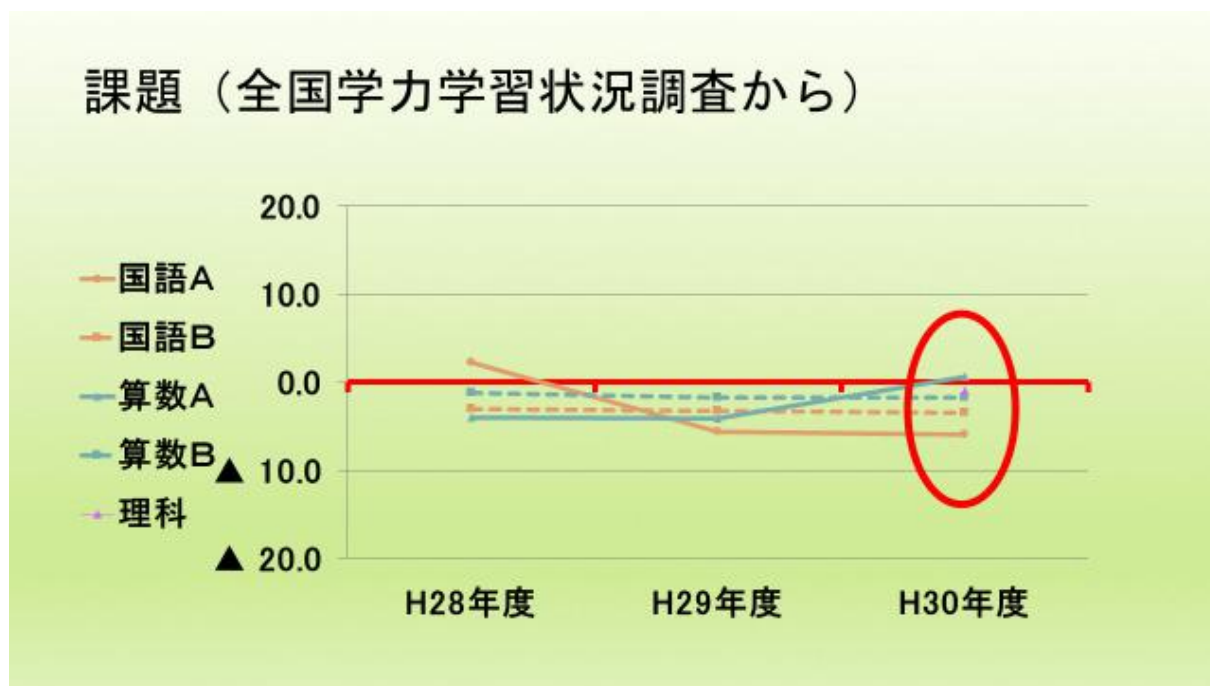
静岡大学大学院教授の村山功先生からは、学力を向上させるために学校がすべきこと等を、静東教育事務所地域支援課教育主幹の清大輔先生からは、校内研修を効果的に行う方法等を教えていただいた。また、熱海市教育委員会指導主事の坂上洋先生には、授業研究だけではなく、普段から数多く来校していただき、授業づくりについて指導をいただいた。



さらに、学校サポート委員会（地域の方や保護者と教職員で作られる会）の方に授業を参観していただき、助言をいただいた。

3. 取組の成果の把握・検証

【全国学力・学習状況調査における全国平均点と本校の比較】



4月に実施された全国・学力学習状況調査においては、上記のとおり、算数Bを除いて全国平均を下回っている。本校児童が最も苦手としていた算数の活用問題に大きな成果が見られたが、学力が向上しているとは言い難い。

【H30年度県定着度調査における県平均点と本校の比較】

[定着度調査の県平均点と学校平均点]

科目種別	国語					
学年	1	2	3	4	5	6
県平均点	89.7	87.4	70.5	78.6	72.4	72.5
学校平均点	89	84.7	73.2	81.2	80.6	68.8

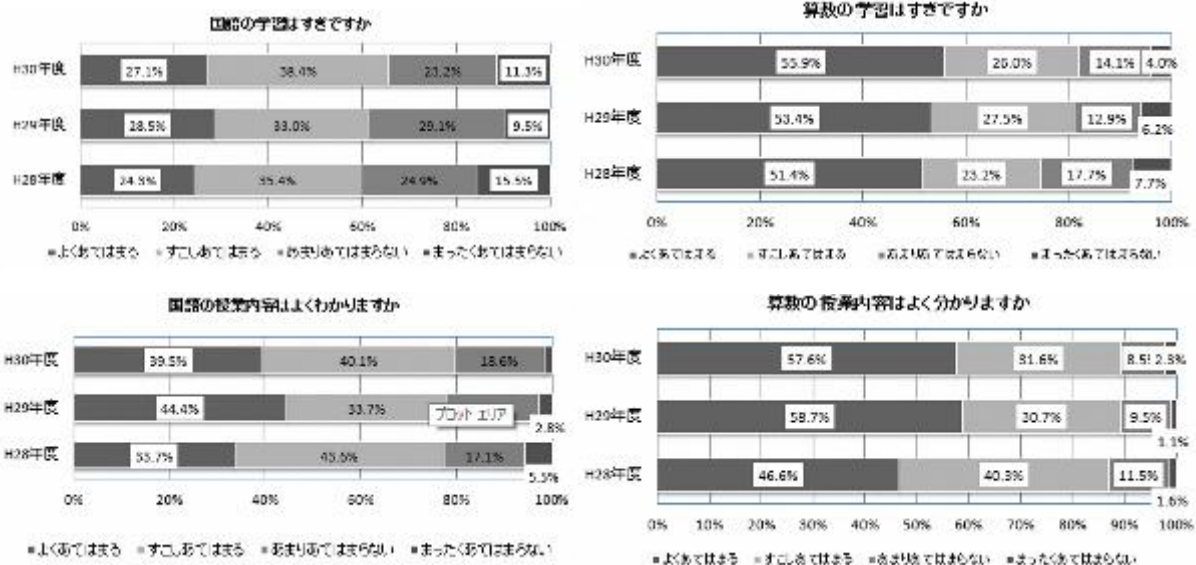
科目種別	算数					
学年	1	2	3	4	5	6
県平均点	95.9	91.3	82.5	79.4	78.9	84.7
学校平均点	98.2	93.7	90.1	88.8	90.8	83.9

1月に実施された県の定着度調査では、国語は半分の学年が県平均を上回った。また、算数では、どの学年においても正答率が高く、県平均も上回った。例年と比較すると、学習した内容が概ね定着していると考えられる。

【子どもアンケートから】

子どもアンケートの「国語の学習がすきか」「国語の授業内容はよくわかるか」「算数の学習がすきか」「算数の授業内容はよくわかるか」を経年比較すると、評価すべき点は、「あまり、まったくあてはまらない」と回答する子どもが減少していることである。学習に向かう気持ちは強く、ある程度理解もしていると考えられる。しかし、「学習がすきではない」「学習した内容が理解できていない」と思っている子どもが、それぞれの問いで1～2割もいることは、見逃してはならない。

[子どもアンケート]



4. 今後の課題

テストやアンケート結果から、まだまだ学力がついてきたとは言えないが、学習への理解度や、学習意欲などについて一定の成果と考えてもよい表れもみられる。次年度も今までの研究を継続・発展させながら、確かな学力が身に付くよう、以下に重点を置いて学校体制で取り組んでいかなければならないと考える。

(1) 夢中で取り組む授業の構築を目指した校内研修

① 主体的に学ぶ課題設定

子どもが、自ら考えたいくなる、解決したいくなる、確かめたいくなるような課題を設定する。そのために、子どもの実態を把握し、今まで学習したことを活用・発展させて、じっくり考えるとなんとか解決できるような課題を考える。

② 対話的な学びを充実させる集団作り

全学年で「聴く力」を徹底的に磨く。その上で、学年に応じて効果的なペアやグループ編成を模索する。

③ 深い学びになっているのか検証

本校が目指す4つの学びの姿「学びに向かう姿」「学ぶ姿」「学びで得る姿」「学びを生かす姿」を確認しながら授業改善に取り組む。

(2) 学びを支える取り組みの継続・強化

○チアアップシート・コンテンツ活用 ○速読 ○家庭学習に力を入れる 等